釈迦如来ネンゴロニスヽメオハシマシタルコトヲ。フカクタノミテ二心ナク念仏スルヲバ。他力ノ行者トマフスナリ

と言う。

隆寛は散心の念仏についてもう一つ『捨子問答』巻下（『続浄』九、一七頁）においてその解決策を示している。ひたすらに念仏ばかりを相続していることができない人のために善導は四種の助業を示したのであるとし、また助業だけでなく余行も一向専念のためと思ってすれば雑行とはならないと言うのである。ここでは「称名ノ行ヲ家主トシテ弥陀二心ヲ係ケ奉ン」と間断なく阿弥陀仏を思うことが強調されている。

隆寛は凡夫であるから妄念が起こり心が散るのは当然であると言う立場から弥陀の他力に憑み常に阿弥陀仏を思い念仏することが大切であり、他力に帰する心に三心が具わるという論理構成をしているのである。

第七項　他力と至誠心

前に問題となった他力と至誠心の関係について、隆寛の考えをまとめてみたい。また、このことが隆寛の他力を考えるうえで最も核となる部分であると考えられるのである。

隆寛の至誠心理解については『散善義問答』の次の部分がわかりやすいと思う。

身礼彼仏口讃彼仏意念彼仏名之為行此三業行帰他力本願之心起以此意為解也本願真実故帰之心名為真実望本願所成真実土心故名為真実然則約所帰願約所求土名真実心以能帰心非為真実心三業悉帰真実他力故三業解行皆真実心中作之也

（『隆全』二、二四頁）

このように真実心すなわち至誠心は他力本願に帰する心から生じると解釈するのである。

『極楽浄土宗義』（『隆全』一、一二一～二頁）にはさらに一向専念も六時の礼讃も七日の別時も自力ではなく、一向に称名の功力を信じ一向に最後の迎接を憑み他力によって思いを遂げるのはこれ皆真実心中の三業の行でありこれを他力の行と言い、これをもって善導は自利真実を立てるのだとする。他力に帰して自利を求めるのはやすく自力を励んで自利を求めるのは難しい。つまり真実心中の自利の行は他力に帰すことが必要であると言うのである。

前項で述べたように隆寛は内外相応の真実心が持てるほどの人ならば自力の道を歩むことができると言う。それでは凡夫には至誠心がないと言うことになる。事実『具三心義』巻上には、

以凡夫心不為真実以弥陀願為真実帰真実願之心故約所帰之願名真実心

（『法然門下の数学』附録一一六頁）

とあり、凡夫の心が真実なのではなく仏の願が真実であり、その真実の願に帰する心を真実心すなわち至誠心と呼んでいるのである。さらに自利真実は、

明改外現精進内懐仮之行欲令三業而帰利他真実

（『同書』附録一二三頁）

のために立てていると言う。隆寛の言う利他真実とは、衆生の側の立てるものではなく如来の利他真実を指すのである。直接的な表現はないが次の自利真実の定義を見ると、衆生の側から言うと自利真実、如来の側に立てば利他真実となることが読み取れる。

阿弥陀如来昔発利他願既成就此意業即以其功徳施与衆生真実不虚

故衆生思惟観察必蒙其益依利他願力得成自利故曰自利真実也

（『同書』附録一三一頁）

ということからも推察される。

如来の立てた真実の願が成就されたということを知った衆生は、その真実に触れることに

よって自らの真実心が湧いてくるのであって、このような宗教的絶対的存在なくしては真実心などありえないとの考え方が根底にあるものと考えられる。

さらに隆寛は、

今真実心者帰(スル)二利他真実(ノ)願一之心也帰(スト)二利他願(ニ)一者蓋称(シスル)二彼仏名(ヲ)一是也

（『同書』附録一二七頁）

真実心者(ト)二本願一之心也

（『同書』附録一三〇頁）

と言い、利他の願に帰し、本願に帰し、他力に帰してその真実に触れることで自らの心が真実となるとの理論展開をしている。これはあくまでも至誠心が自力発心としては成り立たないが他力の発心としての存在を認めるものである。これは『散善義問答』に浄影や天台等の至誠心釈を挙げて批判して、

凡尋常至誠心(ノ)義皆自力発心(ニシテル)非他力発心(ノ)一也可停止(ニハ)一々々(ヲ)

（『隆全』二、二九頁）

と言うことからもわかる。色井秀譲氏も親鸞と隆寛の至誠心釈について、

親鸞では凡夫の側の真実を認めないゆきかたを貫いているが、隆寛は凡夫の真実を否定する立場に立ちながら、その真実があり得るとする方向に向かっている。（「隆寛」律師における善導至誠心釈の理解」・『天台学報』十七、昭和五十年）

と述べている。ここに隆寛の思想の大きな特徴が見出せるのである。

第八項　他力の三心

次に隆寛の三心釈の根底にある他力の三心と言う問題について、それが何を意味するのか明らかにしていきたい。

他力の三心という言葉は『具三心義』巻上（『法然門下の数学』附録一一四頁）に出る。その意味は、

依他力願ノニ発三心ニ故一々之心無四不三依二他力願一是故約テ二所依之願一以能依之心ヲ名他力三心ト一

とある。そして他力の三心が「総明三心義」の結論となっているのである。すなわち他力の願を知り他力に帰すことによって三心を発すために他力の三心と言うのである。